

ボタリ……と雫を地上に落して居る、見るも、痛々しい姿は私をして、深い深い、何等かの印象を、私の胸裏に、刻ませる。月かげ、さやかな夜、獨り是の樹下に在つて、思ふまゝ、泣いて見たいと、一人立止つてあかず、此の古りた杉を視つめた。あ……：思親の峯には、盡せぬ涙を毎に落ちてゐる。

奇 瑞

楓葉 山人

松は萬古の緑を湛わて深淵の水よりも青く、砂はしろがねの瓊玉を散りばめいた如に何處迄も、漣の打寄するが儘に渚をウネ／＼と走つて居る。

こゝは東海の一角市川の浦、未だ開けやらぬ小湊の朝ぼらけに今漸く殘んの燈火が三ツ二ツ消へ初めた。淡い眠りの中空に阿武隈の連脈は黒く南に曲り妙見山が稍々近く正面に峙つて其側らに聳然と巍々の姿を示して居るは是れ房陽の名山、鋸の峻峰である。

時は貞應元春二月の、日は十と六日の曙。

風あれば激浪岩を嘯み、潮沫天に跳る此の大平洋の波も、今日は風さやかに波さへ音を立てず、天も地も山も伏屋も、皆深い／＼眠りに落ちて居る。

然しそれもホンの束の間であつた。明け易い初春の闇は次第に帷りを脱いで、やをら東の山端には曉雲が金色に棚引いた。

と、此の氣持よい朝霧の中を漁ざる里の漁夫、貝拾ふ浦く海女どもが三々伍々組をなしてこゝに集ふた。艚を肩にしたもの、網を携げたもの、腰に魚籠をつるしたもの等皆、様々の出装で濱に立つた。そして暫くのさんざめきが急に静かになつて人々は何物にか驚かされた如に仄暗い遙かの沖を眺めた。

「オヤ！ 何ぢやらう、あのムク／＼したものは」
不審の眉をピリツカセながら先きに立つた老漁夫の口から此の私語きが流れた。

「ウム 何ぢやらう、よんべ歸る時にや慥か何も無かつた筈だのに」

「オヤツ白く見わるぞ、マサカ 不漁の兆ではあるぞ」

「いかうおかしいのう」

奇怪な海上のうごめきものは、濱に私語く甲から乙、乙から丙に、丁に、果てはみんな一様に陣を凝してその怪物の正体を見届けやうと急つた。

折しも忽然と、眼も眩むばかりに太陽の輝きが世界を照した。スワコンと松瘤の如な手を握り占めて漁師共は尙ほ眸をすゑる。

と今迄は只薄暗い海の面に怪物や伏すらむこのみ思ひつめて居た水の表は銀の曙光が輝き溢れて、其のキラ／＼した一面の光りの中には白い蓮華が淵一杯に咲き群つて居た。——小さい奈葉——大きい立葉——それ等に混つて花瓣の大きい、あの白蓮華！

ものどもはアツと一聲、眼を丸くした。

今阿武隈の頂上を放れた旭日は統べての物を蘇へす如にシミ／＼と照り榮わた。そして雪の如うな白蓮の花は一層燦爛の彩りを増した。

あゝ、この美観！

あゝ、この莊嚴！

そして浦人の、玉の緒消へん計りの驚愕と俄かに起る囂々の叫喚！

しばしは讚美の聲が喧嘩の如き騒ぎであつた。

やがて者共は握つた拳の汗も今は冷めたく、ふくよかな、朝のユツタリとした氣分に觸れながら互に好奇の眼を見張つた。そして皆は殆んど狂喜した。夏ならでは咲かぬと聞いた此の蓮が、春立ち初めたとは云へまだウスラ寒い今日此頃の霜風に。

而かも甘水ならぬ海水に、咲きも咲いたわ岸邊一

ぱい！

『何かこの浦に目出度い事があるに違いない』

『ふ、何か珍しい瑞祥が起るだ』

『めでたいのう』

誰語り彼語つて話は益々廣がつて行つた。その時突如、邑の若者は走り來つて沖の蓮花に心を奪はれながらもやうやくにして斯ふ云つた。

『今、師匠殿の内なかで赤坊あかぼうが生れたとよ』

一同の者は再度の隨喜にあわてふためきながら、我れ知らず聲を放つた。

『エー師匠殿の内なかで！ サテコン此の白蓮華の謂は

れも判りよつた』

『あな目出度や』

悅樂と欣喜は群れ居る人々の顔せにあふれ漂つた

『のう皆の衆、それでは之から赤坊の目出度めでたに行かふではないか』

『ウム、行つてた祝ひを謂はう』

『師匠殿は幸せしやうじやなう』

と合ひ槌を打つた半白頭ごましろを先途に、若いもの、老いたのも、皆我れ先きにと師匠殿の館を訪づれるべく姿を陰した。

眞白ろの蓮花は依然として靜かに銀燦の光りを放つて居る、……その美しさ……。

* * * * *
末世の英雄、宗教界の革命兒、日蓮上人は此の奇瑞を履むで眞名次郎重忠公、所謂師匠殿の館に聖誕しましたのである。

あゝ尊い哉、此の奇瑞！。

あゝ芳しい哉、蓮華淵！。

分衛日記【身延詣での一節】

望月 素溪

總門より進みて大平橋を渡り、御山に入れば、吹く風、流るゝ水の音、木々に囀る鳥の聲、咲き匂ふ千草の香、眞の靈山事の寂光たる、身延の山の清き風色は、汚れし吾身心を洗ひ清めて、既往の罪障、今頓に消滅するの思ひがある。

仁王門の邊り、太鼓の響々として、天の伎樂を聞くが如く、亭々として天に柱する老杉の下に、幾多並べる吾同業者は、皆團扇太鼓に拔苦の眞心をこめて居る。

余は菩提梯下に坐して、唱題の太鼓をききつつ、冥想に入つた。吾れ生れて已來、既に三十年、浮世の風浪は思ふがまゝに、余が運命を弄んだ。父の重病母の死、妹の逃亡、吾身の半身不隨、より、今日に至りし有様、債鬼、家主、絶交せし友、無情なる親戚、果は吾が巡り歩きたる、國々の有様など、とりとめもなく、余が目前に浮び来る。

ふと心付けば、何時か太鼓の調子は變て居た。耳を敬つれば、かすかに聞ゆる、御經文『衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿』と、余は之れを聞いて、再び冥想に入つた。浮世の生活狀態は